KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

もう一つの「八〇後」：「詩界80后」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2021-09-24 キーワード (Ja): 中国文学, 八〇後, 80后, 詩人, ネット文学 キーワード (En): 作成者: 楊, 冠穹 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007998

関西外国語大学 研究論集 第114号（2021年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.114（September 2021）

もう一つの「八〇後」
―「詩界80后」―

楊　　冠　穹

要　旨

作品のジャンルが異なるとはいえ、同様にポスト鄧小平時代に青春を過ごした世代として、「詩界80后」と「新概念作家群」には多くの相違が見られる。例えば、今もインターネットを重要な根拠地とした「80后」詩人たちは、民間活動として詩の創作や自主出版を経て、ようやく体制内の文芸誌にデビューし、商業出版とはあまりかかわらないような姿勢を取ってきた。一方、「新概念作家群」は、中国作家協会直属の青少年文芸誌である『萌芽』の意図的な企画によって広く知られていると同時に、文芸誌の連載を通さないで直接に長編小説の出版に至ったという市場経済の原理が果たした結果とも認識されている。本稿は、「80后」詩人が登場する時代背景と過程を整理する上で両者を比較し、「新概念作家群」と「詩界80后」は同じスタートラインに立ったのではなく、むしろまったく異なる道を歩み、二つの平行線を描いていることを検証した。

キーワード：中国文学、八〇後、80后、詩人、ネット文学

はじめに

これまでの「八〇後」作家群に関する研究は、「新概念作文大賽」（新概念作文コンテスト）をきっかけにデビューした1980年代生まれの作家群およびその作品が中心とされてきた。その原因は、彼らを代表する韓寒（1982～）や郭敬明（1983～）らの作家は受賞後、創作活動だけではなく、出版業界および新人の育成にも大きく力を入れており、さらに映画界に進出するなど、社会における自らに対する認識を高めるような活動を行ってきたからである。

しかし、拙論「文学概念としての「80后」：命名の始まりと合理性」[1)] において「80后」の起源を考察する際に、新たな事実に気付いた。文学の領域における「80后」の意味が「80年代生まれの世代」から「80年代生まれの作家群」に変化し、そしてまた「80年代生まれの世代」の意味へと回帰し、改めて「一つの社会学的流行語として大衆の中で広まって」いったというプロセスの中で、80年代生まれの詩人たちすなわち「詩界80后」の存在を確認した。そして、彼ら1980年代生まれの詩人は、登場当初からその後の文学活動まで、「新概念作家群」と完全に異なる道を歩んできたことに疑問を抱き始める。

作品のジャンルが異なるとはいえ、同様にポスト鄧小平時代[2]に青春を過ごした世代として、「詩界80后」と「新概念作家群」には多くの相違が見られる。例えば、今もインターネットを重要な根拠地とした「80后」詩人たちは、民間活動として詩の創作や自主出版を経て、ようやく体制内の文芸誌にデビューし、商業出版とはあまりかかわらないような姿勢を取ってきた。一方、「新概念作家群」は、中国作家協会直属の青少年文芸誌である『萌芽』の意図的な企画によって広く知られていると同時に、文芸誌の連載を通さないで直接に長編小説の出版に至ったという市場経済の原理が果たした結果とも認識されている。

同じく80年代生まれの世代である以上、こういった「詩界80后」と「新概念作家群」の間に生じた違いは、社会の発展や時代の変化などでどうしても片付けられない何かの、より本質的で根本的な相違が存在している。それに、その違いはきっと何かを示してくれている。このような「80后」内部にあるスプリットは「命名の暴力」に対抗できる強力な武器になるはずだが、長い間優位性を持った「世代（generation、中国語：代際）論」が原因で重要視されてこなかった。「詩界80后」と「新概念作家群」は世代論の文脈の中でそれぞれ議論されているにもかかわらず、それらの議論もまた結論的に世代論に終結されてしまう。そこで、本稿では、「詩界80后」が登場する時代背景と過程を整理する上、比較的な視点から「新概念作家群」と対照しながら分析し、二つの異なる「八〇後」が存在していることを検証したい。

メールマガジンによる初期の民間文学活動

「詩界80后」の誕生には、その前世代とされる「70后」と民間詩人の存在が欠かせない。またその背景となったのは、1990年代に急速に発展し始めた、中国人社会による中国語圏のインターネット世界の拡大であった。1994年、中国国家コンピュターとネットワーク施設（The National Computing and Networking Facility of China、略して NCFC）[3]により、中国は初めて国内外のインターネット接続サービスを実現した。このニュースは同年12月27日に刊行された『光明日報』により、「1994年中国十大科学技術ニュース」として選出されており、多くの科学関係の機関紙に転載されている[4]。

2001年に出版されたコロンビア大学の論文集『コロンビア中国文学史』（原題：*The Columbia History of Chinese Literature*）[5]によれば、90年代初期の中国民間詩界の形成はメールとインターネットによって初めて可能となったという[6]。残念ながら、90年代初期の詩を中心としたネット文学の痕跡はほとんど残されていない。その上、ネット文学の学術上の価値が認められるようになったのは近年のことであり（この点に関して「新概念作家群」も実は同じ状況にあるが）、参考できる資料は極めて限られている。

幸いに、2011年に国家社会科学基金の重点企画として、「インターネット文学文献アーカイ

ブ」プロジェクトが中南大学教授の欧陽友権[7]により推進され、その成果の一つとして『中国ネット文学編年史』[8]が出版された。同書は具体的な文献のタイトルを提示した一方、詳細をリストアップしなかったが、一部現存のネットサイトや検索可能な資料をもって確認を取りながら参考するには価値のある著作と考える。また、shigeshi.com という公開のサイトには、1993～1996年のネット詩界に関する資料のスナップショットデータがバックアップされている。これらの限られた資料を参照し、以下、民間詩界が形成する流れをおおむねに整理する。その上、「詩界80后」の誕生の背景にあった状況とその特徴を考察する。

1991年４月５日、華人社会最初の電子ジャーナル『華夏文摘』が、当時アメリカ在住の中国人留学生によって創刊された。現存の公式サイト cnd.org には「2021年３月６日 CND 成立32周年、2021年４月５日『華夏文摘』創刊30周年」と記載されていることから、『華夏文摘』の前身は *China News Digest*（略して CND）というメールマガジンであり、主にニュースを扱っていたことがわかる。『華夏文摘』は後に最も広く知られる華人文芸メディアとなり、今現在も存続している。

1991年12月20日に配信された『華夏文摘』第38期には、「中文詩歌網絡（中国語詩歌ネットワーク）は、詩歌愛好者たちが詩をシェアおよび討論できるために設立され、現在は200余人が参加した。このネットワークは編集者を置かず、定期的な出版も行わない。誰でもいつでも好きな詩をアップロードすることができる」と、華人社会最初の詩のネットワークを紹介している。このネットワークに参加した会員は主に北米やヨーロッパ在住の中国人留学生や中国人学者であり、メーリングリストの形で自由な投稿が行われていた。また、同ネットワークは世界最初の中国文学を扱ったインターネット・コミュニティでもある。

1992年５月１日、『華夏文摘』第57期が配信され、そこには図雅という詩人が発表した詩が掲載されている。詩は『祝願：友人へ』と題しており、ネットで発表された最初の中国語現代詩作品と言われている。図雅という人物については未だに正体不明だが、彼（あるいは彼女）の個人文集『図雅的涂鴉』（図雅の落書き）[9]は2002年に、大手の出版グループである現代出版社によって刊行されている。なお、図雅は1996年をもってネット上から消えてしまったが、それまでの発言から見ると、高度な数学知識を持っていることから、数学に関連する専攻をしていたと推測される。

1993年３月、詩陽（1963～）という詩人がメールマガジンの形式で、*China News Digest* と中国語詩歌ネットワークを通して多くの作品を発表し始めた。彼は中国安徽省出身で、1985年にフランス・イギリス・アメリカなどの留学し、博士学位を取得した。1995年、彼は『コロンビア中国文学史』にも言及された、北米最初の中国語現代詩に特化した文学マガジン「オリーブツリー」（中国語、橄欖樹[10]）という電子ジャーナルを創立し、自らが編集長を務めていた。詩陽はその後も多くの詩刊を編集し、個人の詩集も出版されている。

同年、オリーブツリーは大きな改版を経て、総合的な文学電子マガジンに変身し、現代詩に特化したメディアであったオリーブツリーは消失した。代わりに登場したのは北米のもう一つの詩刊『新大陸』の電子版である。『新大陸』は1990年12月にロサンゼルスで創刊された民間刊行物であり、編集から印刷・装幀まで全てが創刊者の三人の華人詩人によって行われた。同誌には後に多くの詩人が参加し、華人社会の支援の下で1996年に電子化され、インターネット上で公開された。

こうして、インターネットを用いた民間人による文学創作の可能性が確立され、その「民間人」たちには鮮明な人物像が見えてくる。彼らはいずれも、留学生や学者が中心となった高度な教育を受けたいわゆる知識人であり、そして当時においてはまだ珍しかったインターネットに関する科学技術の知識を持っている。彼らの多くは文学愛好者であり、純文学を目指して自発的に文芸創作を行った。その創作活動の基礎となったメールマガジンシステムは後日、ワールド・ワイド・ウェブ（World Wide Web、略して WWW）時代に入るとネットサイトの姿で再発展し、「80后」詩人の登場と成長に欠かせないメディアを生み出すのである。

ネット文学と「80后」詩人の登場

1995年11月、作家の王周生（1947～）は「信息時代与文学」（情報の時代と文学）[11] を発表し、『華夏文摘』を例にインターネットの出現が文学に与える影響と、その変化に対する文学界の懸念を述べている。王周生は通俗文学の過度な生産を批判しながらも、大衆文学の影響力を肯定し、電子メディアが文学創作にもたらす積極的な一面を賛同している。

同時期に、中国ではインターネット接続サービスの展開により、一部の大学は掲示板を運営し始め、文学愛好者の大学生は海外のネット文学を大学掲示板に転載するようになった。さらに、「ネット文学」という概念の定着につれ、転載に止まらずに文学創作に投身する若者が現れた。彼らは1970年代生まれでいわゆる「70后」作家群である。中には、例えば日本でも作品が出版されたアニー・ベイビー（現名：慶山、1974～）[12] が挙げられるが、彼女は1998年から当時もっとも大規模の文学サイト「榕樹下」[13] で連載して人気を集め、商業出版に至ったのである。当時、後に「榕樹下」経営者となった路金波（1975～）[14] も「李尋歡」[15] というペンネームで小説創作を行っていた。

1997年７月26日、中国社会科学院文学研究所主催、北京大学文学研究所提携の現代漢詩学術研討会が福建省で開催された[16]。カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授、台湾詩人の杜国清は「网路詩学：21世紀漢詩展望」（ネット詩学：21世紀中国語詩への展望）[17] を題に研究発表を行った。同発表はインターネットと詩学をキーワードにした最初の研究と思われる。

1999年１月、「重慶文学」というサイトで『界限』が創刊された。『界限』は中国国内最初の

ネット詩刊とされるが、「オリーブツリー」や「榕樹下」らの完全なる電子マガジンとは異なり、紙面ジャーナルの延長であった。同年、5月に上海三聯書店は人気のネット小説作品集[18]を企画し、2000年1月に出版した。アニー・ベイビーの代表作『告別薇安』（さらば、ビビアン）も同時期に中国社会科学出版社によって出版された。

この頃、ネット文学に対して学術界では批判の声もあったが、ネットサイトと紙面ジャーナルはどちらも両者の融合または提携を望んだ。1999年9月、中国共産党上海市委宣伝部直轄の『文学報』は「榕樹下ネット文学コラム」を開設した。その後、「榕樹下」ネット文学作品シリーズ書が上海文化出版社から出版された。さらに、「榕樹下」は1999年11月に第一回ネット文学作品賞を発起し、王安憶（1954～）や賈平凹（1952～）、余華（1960～）などの権威的な作家が審査員を務めた。この賞は若手作者の創作意欲に大いなる刺激を与え、ネット文学は初めて文学界の視野に入った。

このように、インターネットを通して作品を電子マガジンや文学専門のネットサイトに掲載することである程度の認知度を博し、そして紙面のジャーナルに投稿や出版に至り、最終的作家としてデビューするというプロセスは、文学界に認められるようになり、2000年以降「80后」詩人のほとんどはこのプロセスを継承し、同様な形で文学創作を始めたのである。逆に、同じ時期に「新概念作家群」が文芸誌（電子マガジンを含む）の連載を通さず、直接に長編小説の出版に至ったのはむしろ画期的なことであった。他方、体制内詩界はインターネットを用いて積極的に発信する動きを見せてくれた。例えば、1957年創刊された四川省作家協会主催の『星星』詩刊は、建国後最初の詩歌専門ジャーナルとして、早くも1999年にネット版サービスを提供し初めた。

2000年3月、「詩江湖」サイトが開設され、2001年から同サイトは『江湖月刊』を配信し始めた。「詩江湖」の前身は北京師範大学中文系卒業の詩人南人（1972～）の個人ホームページであり、かつて北京師範大学の青年詩人がよく集まっていたが、後に「70后」詩人すなわち「下半身」作家群の根拠地となった。詩人桑克（1967～）は「詩江湖」を「鋭くて個性的な」サイトと指摘し、70年代生まれの詩人たちは「70后」の概念から離脱し、「下半身写作」の主張を実践したことに対して高く評価している。現存の「詩江湖」サイトは wenxue2000.com のドメインを使っており、『江湖月刊』のデータは全てそのまま保存されている。アクセスは可能だが、2010年以降の更新は見当たらない。また、桑克自身も2000年2月に自らが監修した「詩生活」サイトを開通している[19]。「詩生活」は独立したサーバーと専用のドメイン（poemlife.com）を持つ最初のネット詩刊であり、毎月5日に『詩生活月刊』を配信し、今現在も継続している。

こうして2000年前後に急速の発展し始めた中国国内のネット文学は、海外華人世界における民間文学のメールマガジン時代の継承であり、形式上ほとんど変わらない上、その創立者や参加者もまたいずれも高等教育を受けた知識人が主流であった。小説家の場合、アニー・ベイビー

は大学生ではなく、短大卒の銀行員だったが、詩人の方は大学中文系の卒業生か在学生がほとんどだった。しかし後に「80后」詩人の登場とともに「異類」が現れる。

「詩江湖」現存のデータの中から、「80后」詩人の登場が確認できた。例えば、後に小説創作に転身した李傻傻（1981～）や春樹（1983～）などが挙げられる。李傻傻は国家重点大学の西北大学中文系卒業、現在中国作家協会会員で80年代生まれの代表的な作家の一人である。一方、春樹は高校中退後創作活動を開始し、当時大きな反響を引き起こしたが、現在はほぼ活動していない様子である。2001年４月30日に公開した『江湖月刊』2001年第４期の「新人亮相」コラムに李傻傻の「見鬼」「西行瞎記」２作が掲載されており、同年８月４日に公開した2001年第７期の「又見新人」コラムに春樹の「情絲」「世界小姐」２作が掲載されている。両者の当初の作品はいずれも「下半身写作」の影響が見られる。

例えば、「西行瞎記」は以下の叙述がある。

…

我把一張紅桃Ａ（私は一枚のハートのエースを）

放到少女河湾一様平静（少女の入り江のような平静で）

又清洁的阴戸（清潔な外陰部に置いた）

…

また、春樹の「情絲」はこのように書かれている。

…

我们迅速做了第一次愛以后我発現我们有一种异様的感覚（私たちが迅速に初めてのセックスをした後私は一種の異様な感覚に気づいた）

你像是来自另外一个国家的人説着地方主義的語言（あたなは別の国から来た人で地方主義の言語を語っている）

…

李傻傻と春樹は同じ「詩江湖」出身で、作風も同様に大胆であるにもかかわらず、北京師範大学教授の張檸（1958～）によって李傻傻は実力派、春樹はアイドル派に分けられている。[20] このような分け方には張檸の誤解があった[21] のだが、一方、上海名門の華東師範大学卒業かつ作家で北京師範大学教授である張檸にとって、春樹のような「異類」に北京師範大学中文系卒の李傻傻と同等な「実力」があるというのは、おそらくそう簡単に受け入れられることではなかっただろう。この点については、春樹同様に高校中退の韓寒も同じくアイドル派に分類され、その実力は長い間認められなかったのである。

しかし、春樹の登場は「80后」詩人にとって実力以上の意味を持っている。2001年11月、春樹は「詩江湖」サイトの掲示板で「80后の現代詩愛好者たち、全員集まれ！！！」と投稿した。2002に、彼女は自ら編集した『八十后詩選』（第一輯）を自主出版し、さらに2003年と2006年

にその第二輯と第三輯を自主出版している。青年学者、北京大学中文系訪問学者だった詩人趙目珍（1981～）が春樹を「80后」詩人のカリスマ的な存在としている[22]ように、彼女は早期に作家として自己認識に目覚め、自分たちの存在を名付けることによって再確認し、若手創作者の集結を目指したのである。

実は、春樹のような自主出版は当時、それほど珍しいことではなかった。90年代半ば、民営出版産業は大きな繁栄を迎えた。その中、海外華人による民間の文学出版と似たような活動は、当時の「70后」詩人の間ですでに展開されていた。例えば、1990年11月にハルビンで創刊された『詩参考』という民間紙は、1991年から定期的に刊行され、1995年に北京に転移し、1998年に全国有数の民間文学刊行物となった。[23] 北京師範大学教授の張清華（1963～）は『詩参考』について「比べられるものは他にない」[24] と、その文学性を絶賛している。

『詩参考』は電子版にならなかったが、早くも2000年７月に「80年代出生的詩人的詩」のタイトルでコラムを開設し、80后生まれの若手詩人たちの最初の大集合と言われている。[25] これら影響力のあるネット掲載と自主出版を基礎に、「80后」詩人はようやく体制内の主流文芸誌に一つの集合体として出現した。2002年６月、共産党瀋陽市委員会宣伝部の管轄の下、瀋陽市文学芸術界聯合会発行の『詩潮』という1985年創刊された月刊文芸誌が、「校園詩抄：80后詩人作品専輯」[26] いわゆる若手詩人作品の特集を掲載した。[27] 特集は計15名の1980年代生まれの詩人の作品を集結しており、作者の名前（一部はペンネーム）の前に必ず大学の名前が付いていることから、彼らは全員大学生であることがわかる。

二つの平行線：「詩界80后」と「新概念作家群」

「詩江湖」サイトが成立してまもなく、「80后」詩人たちはまだ民間活動をしていた2000年５月、韓寒のデビュー作『三重門』が作家出版社によって出版された。この突然すぎる出版は韓寒の新概念作文コンテスト入賞に関連しており、社会にも大きなインパクトを与えた。また、作家出版社は第一回新概念作文コンテストの入賞リストが発表された1999年５月から、今も「新概念作家群」の多数の作品を出版している。名前からわかるように、この1953年設立された体制内の大規模な出版社は、言うまでなく作家協会傘下の出版社である。そして、作家協会というシステムは、社会主義文学における文学の生産者であり、管理者でもある。

「新概念作家群」登場の経緯と建国後の出版状況については、以前拙論[28] においてすでに説明しているため、ここでは一々くどくど述べるつもりはない。そもそも、「新概念作家群」の育成を図った『萌芽』雑誌自体は青少年向けとはいえ、本来作家協会に直属している文芸誌である。短期間内に無名な高校生を受賞させ、商業出版までサポートし、そうして『萌芽』と同じく作家協会傘下にある作家出版社が共同で推進した「80后」作家の養成計画はとても意図的

ではないように思えない。加えて、韓寒や郭敬明（1983～）、張悦然（1982～）らへの作家協会入会勧誘がニュースになっていたことも興味深い。教育改革を盾にした裏には、市場経済原理を利用し、体制内の後継者を育成するという目的が存在していた可能性が極めて高い。

特に、「80后」詩人たちが詩界で成長していく過程に比較すると、「新概念作文コンテスト」は文学イベントではなく、新しい世代の若手作家とますます発展していく民営出版市場を体制内に取り込もうとするためのイベントであった構図が見えてくる。もっとも、第一回「新概念」の組織委員会[29]に、北京大学や復旦大学をはじめ、多くの大学副長が委員として参加していることから、「育成」の意図がうかがえる。また、組織委員会の主任を務めた徐俊西（1935～）が上海市作家協会党組書記兼常務副主席であり、元中国共産党上海市委員会宣伝部副部長であることから見れば、「新概念」における作家協会すなわち体制内側の関与は明らかであると言えよう。

さらに、評議委員会は、鉄凝（1957～）、方方（1955～）、陳思和（1954～）、賈平凹（1953～）、葉辛（1949～）ら計13名の作家によって構成されているが、3名の大学教授を除いて全員が作家協会の会員であり、そのほとんどが幹部である[30]。作家協会の許可がない限り、こうして総動員のような行動ができるとは考え難い。実際、「新概念作文コンテスト授賞式の前、上海作家協会副主席かつ『萌芽』雑誌編集長の趙長天はわざわざ韓寒に会いに来て、（韓寒の）日常生活や学習状況について話を聞き、（韓寒を）強く励ました」[31]と、韓寒の父親である韓仁均が著したエッセイ『児子韓寒』にも記述されているように、作家協会の幹部が代表する体制内側は受賞した新人に対してかなり積極的な姿を見せていた。

幸運な「新概念作家群」と真逆に、「80后」詩人は彼らの先輩たちのように、自発的な民間活動からスタートし、文芸誌投稿を経て評価され、ようやく文学界に認められて最終的に文壇に入れて、本格的な文学活動を始めたのである。その背景には数々の文化人・知識人の長きに渡っての努力と、十数年以上積み重なってきたゴールに至る経路への模索があった。同じく80年代生まれではあるが、「新概念作家群」と「詩界80后」は同じスタートラインに立ったわけではなかった。彼らはむしろまったく異なる道を歩んでいき、二つの平行線を描いている。

このような「八〇後」内部における巨大な差異は、これまで80年代生まれの作家をめぐって論じる時にしばしば言及される「世代」の問題よりも、いっそう鮮明で大いなる時代像を反映しているのではないか。

注

1）『日本中国当代文学研究会会報』第34号、2020年12月、30～38頁。同稿は「八〇後」命名の由来を考察するものであるため、中国語表記の「80后」をそのまま用いた。本稿においても同様な処理を行う。

2）1997年以後を指す。藤井省三『中国語圏文学史』（東京大学出版社、2011年、148頁）による。

3）NCFCについては、中国科学院（Chinese Academy of Sciences、略して中科院）の公式サイトを参考した。2021年４月28日最終アクセス、
http://www.cas.cn/kxcb/kpwz/201404/t20140419_4093686.shtml

4）例えば、『社科信息文薈』（中央党校図書資料センター管轄下のコアジャーナル）1995年第３期28頁と『科技信息』（中国国家新聞出版署許可、山東省科技庁管轄下のジャーナル）1995年第２期３頁などが挙げられる。

5）Columbia University Press、2001年。筆者が参考したのは2010年に刊行された電子版（Kindle版、Amazon.co.jpから購入）である。

6）第三章、453～465頁、Michelle Yeh「現代詩（Modern Poetry）」。原文：…poetry started to become available by electronic mail (e.g., *Kan-lan-shu* [Olive Tree: Chinese Poetry Magazine] at editors@wenxue.com) and on the Internet (e.g., *Modern Taiwanese Poetry League* at www.jour.nccu.edu.tw and *Shuang-tzu-hsing jenwen shih k' an* [Gemini Poetry Journal]at www.gemini.neto.net).

7）中国ネット文学研究者、ほかにも『当代中国ネット文学批評史（原題：中国网絡文学批評史）』や『ネット文学批評理論と実践（原題：网絡文学批評理論与実践）』（いずれも中国社会科学出版社により出版、2019年）などを著している。

8）欧陽友権・袁星浩編著、中国文聯出版社、2015年。原題：中国网絡文学編年史。

9）中国語の「図雅」と「涂鴉」はアクセントが異なるが、ほぼ同じ発音である。

10）台湾出身の女性歌手チー・ユーは1979年７月９日に同名のアルバムを発表している。同曲はチー・ユーで代表作の一つであり、当時は第二回香港中国語ゴールドディスク大賞ベスト10に入賞した。詩陽の歳から考えれば、この曲に影響されタイトルを借りた可能性は高い。

11）『上海社会科学院学術季刊』1995年第４期、173～181頁。

12）代表作『さよなら、ビビアン』（泉京鹿訳、小学館、2007年）が挙げられる。

13）直訳すると、「ガジュマルの下で」になる。中国系アメリカ人朱威廉（1971～）によって開設され、2020年８月25日にサーバーをシャットダウンされ、サービス終了となった。

14）路金波は西北大学経済学卒業、李傻傻の同門である。彼は2000年以降、民営出版に専念し、韓寒『一座城池』（二十一世紀出版社、2006年）、王朔『我的千歳寒』（作家出版社、2007年）などの作品をプロデュースした。

15）古龍（1938～）の武侠小説『多情剣客無情剣』（1968～1970年まで連載、邦訳は早稲田大学中国文学教授岡崎由美により翻訳され、2002年に角川書店から出版されている）の登場人物である。

16）荒林「現代漢詩学術研討会総述」『山花』1997年第10期、76～78頁。

17）『東南学術』1998年第３期、78～82・110頁。同論文は、『現代漢詩：反思与求索　1997年武夷山現代漢詩研討会論文匯編』（作家出版社、1998年）にも収録されている。タイトルに使われた「网路」という言葉は、台湾で使われるインターネットの言い方であり、中国では「网絡」と呼ぶのが一般的である。

18）顧暁鳴編、作品集のタイトルは『進進出出：在網与絡、情与愛之間』（出入りする：「インター」と「ネット」、情と愛の間に）である。欧陽友権は1999年５月に出版されたと述べているが、中国国家図書館の資料によると実際出版されたのは2000年１月であるため、1999年５月は企画段階と推測する。

19）桑克「互聯網時代的中文詩歌」『詩探索』2001年第１－２期、５～19頁。

20）張檸「青春小説とその市場背景」、原題「青春小説及其市場背景」、『南方文壇』2004年第６期、19～21・51頁。日本語訳は高屋亜希訳『中国同時代文化研究』（第４号、好文出版、2011年、64～80頁）参照。

21）楊冠穹「文学概念としての80后命名の始まりと合理性」注41、『日本当代中国文学研究会会報』第34号、2020年12月、38頁。

22）趙目珍「自選本視野中的“80后”先鋒詩歌」『三峡論壇（三峡文学·理論版）』2019年第５期、44～49頁。

23）中島「回顧『詩参考』」『上海文学』2005年第２期、64頁。

24）張清華「『詩参考』：脹破時代的修辞与倫理」『上海文学』2005年第２期、69頁。

25）趙衛峰「大事記或十年脉象 中国80后詩歌進行時」『詩探索』2012年第３期（理論巻）、86～110頁。作者は70年代生まれの詩人、評論家であり、中国作家協会の会員である。

26）『詩潮』2002年第６期、64～66頁。

27）今件は拙論「文学概念としての80后命名の始まりと合理性」（『日本当代中国文学研究会会報』第34号、2020年12月、30～38頁）にも記載している。

28）楊冠穹「「八〇後」と現代中国出版市場の変容～韓寒を中心に」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第17号、2014年11月、65～89頁。

29）『首届全国新概念作文大賽B巻』（作家出版社、1999年、471～472頁）により。新概念作文コンテストは毎年、受賞作をまとめて作品集として出版しており、附録に組織名簿と受賞者リストが添付されている。これまでの作品集から見れば、毎年の委員会の構成員は若干変動するが、そのほとんどが作家協会の会員であることは変わらない。

30）各会員の詳しい情報は、中国作家協会公式サイト（www.chinawriter.com.cn）の「会員」項目から確認できる。

31）韓仁均『児子韓寒』、万巻出版社、2008年、49頁。

（よう・かんきゅう　外国語学部助教）